

蜉蝣 徵象 記

小笠原 秀 實

生涯を蜉蝣に託すれば輕きこゝ微風の如く、身世を幻化に比すれば罣碍なきこゝ晶宮の如し。流れ行く時なるものあるこゝなく、擴がれる虚空さへもなき曠茫の解脫に、暫く繫縛の紛糾を樂み、纔に時を緣して人間に歴史を編み、戯れに十方を立して微塵に左右を分つ。現實の如く、夢遊の如く、砂塔の如く、鐵圍の如し。

今年歲次甲戌、夏、空理をさゝやかなる必然に編んで、名づけて「意識の體系」と呼ぶ。酷熱大地を灼き、清風、高山に退く。窮理思辨のこゝ、たゞ善縁を山上の爽涼に俟つ。乃ち一筆數紙を携へ、墨汁を腰間の衣囊に收め、西、愛宕の山巔に行く。下界の熱線、百度に迫らむとする日、山上なほ七十餘度を保ち、輕風頻に來つて焦燥の雜念を嘲る。峰巒めぐりにめぐり、綠樹並びに並ぶ。廣野南に開け、大河地文を飾る。大堰と淀と木津、三條の交錯、大地の熱鬧もこの境域に到るに及んで清涼の一縁に似たり。峽間に河鹿を聞き、森林に亂鶯を聞く。すべて想化の喜びなり。日沈むで夜氣頻りなる頃、索條にたよつて靜かに山を下り、再びさめやらぬ熱地街頭の人となる。かゝる行程を繰るこゝ月餘、ある夜は山上に月の圓かなるを見、ある夜はさやかに見えぬ風の音に驚く。忙中の閑事の如く、又閑中の忙事の如し。秋風山を下る頃、思辨錯綜の工作を終り、剗の雜事を離れ、遊化感興の一日を許されたる頃は、秋も半を過ぎたり。すべてあはたゞしく、はてしなきこゝ、草の實の飛ぶにも似たり。

十月十四日、車に輕油を燃き、車輪に空氣を張り、一路南を指して法隆寺に行く。走りに走れども盡さざる長堤の彼方、水冷きは巨椋の池なるべし。

鈍色の巨椋の池は枯れ蓮の並ぶ限りを風過ぎて行く

水草のあまた多かる池なれば今日を淋しき秋になしつゝ

山城の境を出で、たゞなつく青垣山の大和には入れざるも、尙未だ紅葉の日に到らず、尾花のみ、野を溪を靡く。

春日の山を左に、古の奈良の都を右に、人多き大路を南に走り、又西に急ぎ、舗時に早く法隆寺に來る。松樹塔影古の如く、又今の如し。東門の修理漸く進み、この日無線放送の企てあり。板に圍みたる小舎、今しも機の前に文字を讀めるは修繕の技師なるべく、舉げらるゝ數字、柱梁の數なるべし。修理の主體たるべき東門は、今悉く解體されて一木をこゝめず、高く聳えたる板葺の鞘のみ、ひこり故地を守る。かくの如くにして世々の修理、改築に近く、古形の墨守まことに難きに似たり。今、史實復舊にもえ、原態を守るに學術の精微を盡すに努むれども、ありし日の修理、必ずしもかゝる實證に泥まず、纔かに傳統尊重の要請よりして古形を學べるに過ぎざりしなるべし。この日聞く處に依れば、解體せるこの門の棟木、却つて風雨に曝され、外側の桁、外面のみ風雨に傷み、曾ての日、棟木と桁とを交置せるが如し。この種の修理、殆んど改築と選ばざるにも似るか。藝術樣式の踏襲と變改と、規範あるが如く、又無きが如し。

ほりかへし高くつまれし土くれの一つ一つに夢のある里

法隆寺再建非再建のこゝ、今尙人を惑はす。共に確證なし。然れどもすべて傍證の集積、やがて考察の常識を築く。そはたゞ史の考證にのみ限らるゝにあらず。論理の思辨に屬するもの、生存の基調に關するもの、説すべて左右に岐るゝもの、多く決定を確證に缺く。かゝる折、傍證の集積、一定の常識を作り、理外の理、證外の證を確立す。かの中世

神學に於ける創造神の有無、共に確證なく、今尙新舊、見を別にす。而も大勢の趨くところ概ね無きに歸す。政治機構のこゝ、封建と立憲と、長短錯綜すれども、時代の信念、殆ど立憲の一つに集る。再建、非再建のこゝ、傍證多く再建に重り、今や漸く考證の常識を構成し得たるに近し。

しき砂の白きが上にこぼれたる松葉松葉のいと靜かなり

ふりて行く築地にからむ草の葉のこゝかすかに動く風あり

三

金堂に釋迦牟尼を拜み、又藥師を仰ぐ。こゝに千三百年の古佛、森嚴時と共に加はる。思ふに藥師はこの堂の主尊、今釋迦牟尼を中央に崇め、主尊を却つて東に配す。造寺造像の本願、この配置に添はず。然れども藥師を中央に奉祀すれば、形像の大小に造型の均衡を破る。願意に添ふべきか、均衡の靜平に行化の益を蒙るか。解脱の一道に絡んで道心と藝術との分岐、また甚だ機微に亘る。

いつの日か繫縛繫縛の彼方にて心外すべてをうつくしと見む

中尊の位置に關する疑惑、甚だ非再建の説に絡る。若し藥師佛をこの堂の主尊となさば、臺座並びに天蓋小さきに過ぎ頗る衡整を失へるに似たり。鑄造と建築との間に統一の企劃を缺けるが如く、このこゝ又再建の確證をなさずとは雖も、傍證の一つを加へ得るにも似るか。その他堂内の諸尊、釋迦、藥師の二佛を除きて、すべて建造と齡を共にせず。若し天智の災なかりしとせば、原態を失へるこゝのあまりに多きを怪むべし。更に建築の一部を構成し、不離の關係あるものにして、時代を明確にし得べきものは、寧ろ悉く、和銅以後に屬す。中門の力士、塔婆の塑像。金堂の壁畫さへや白鳳の實證なし。傍證の集積かくの如くにして、常識また無奇特の快明を待む。

静けさのはてしなればか天女はも賔たれたり姿忘れじ

千年の時をさするの心して柱撫つればたゞに冷し

六朝、飛鳥の造型的感觸、質實にして緊密、朴率にして森嚴、すべて性靈を内律に待み、ひたぶるに肉感の爛漫を拒む。誠に得安からざる時代の精進なり。廬山の慧遠、佛銘の一つに云ふ。「中姿自明、白毫吐曜、昏夜中爽、感應乃應」之。又「庭宇幽藹、歸塗莫測、悟之以靜、挹之以力」之。般若皆空の智慧、多く俗諦の肉性を離れ、眞諦の幽藹を中姿の自明に表示し、白毫吐曜して昏夜を中爽たらしむ。眞理之象徵之、寂滅之再現之、一心に絡むで端なくもこゝに超感の形象を凝らす。結縁、筌蹄を待み、應化、指標に影現し、感激常の日の一日にあらざれども、迷悟のこゝに誠に宿因の深厚に待つべく、千歳歴史の長きに亘つて、昏夜あはれにもたゞ一日の如し。斷惑のこゝに、遂に般若辯證の彼岸にも似るか。

かへり見る年の千年の長さにてなほ人間の迷新し

玉虫の厨子は蒼古の姿にして質實、このものゝみよく六朝の畫風を今に残す。龕扉の菩薩、典雅にして清瘠、就中六根の六塵を拂ひ、清爽之清勁之、等しく造型の骨格を築く。移り行く諸行の無常に漂つて尙幾歳の示現を此土に止めむこはする。行化の今に尙新しき、まことに末代の奇特とも名づけつべし。半偈、寂滅爲樂の爲めに捨身せる本生行傳の臺座を彩れる、また明日を生きむとするものへの答なり。

寂滅の半偈を聞かむ願ひより菩薩捨身の姿ある寺

聖象の今に残りて人間の捨身行苦にものを思はず

四

名にし負はずとも夢殿ははかなき夢の跡なり。聖觀音の温容、夙に和國の情感を芽ぐみ、清洒之清婉之、すべて正統の源なり。中興の行信之富貴の道詮之、兩像、時代を別にすこは雖も、造型の氣脈甚だ近きに似たり。

つぶらかにまなこ見はりて夢殿の夢のみほけ今日にまします

興法のその日もありき法難のその日もありて今日の夢殿

中宮寺は白砂を盛り、庭樹を刻み、さゝやかに美はしき寺の名なり。古、三宮の中、中宮のあまにしあればこてこの名を止めたりとも云ふ。聖壇の彌勒、思惟今細やかなるが如く、指頭軽く豊頬を支ふ。感觸滑かにして、官能豈なり。胸宇肉性の旋律、麗かに柔く、兩臂曲線の諧調、凝晶せる音律の如し。推古の古式多く童顔に象る。次で官能に醒むるや、豊饒、甚だ女體に學ぶ。三十二相は多く嬰兒の形態に象れども、人間造型意識の自らなる開發は、やがて成熟女體に感觸の華やぎを掬む。また歴史の機微に觸れむ心に似たり。

曾て法起寺、法輪寺を訪ねてより年あり。薄れ行く記憶を惜んで、野道の細きを北東にたざる。途上

斑鳩の宮居のあまは風立ちて忘れられ行く時の口づけ

西詩の譯に云ふ。流れの岸の一もこは、波こさぐく口づけし、はたこさぐく忘れ行くこ。多感の情念を冷靜の時劫に、姿甚だ遠きも、忘却の一相、こもに曠茫として、哀れを人間にそゝる。すべて形あるものは壞れ、時に浮ぶものは忘却のわたつみに融會す。成住壞空の四相、法隆學問寺をあやなし、成住の二相今すでに爛熟、纔かに壞相を人爲の科學に護る。質料の風化、やがて空相の他日を豫記す。壁畫の剝落、その日に到り、補修、原態を壞つ。白布に畫面を覆ひ、春秋二季、日を期して開くも、悉く彌縫の窮事。人間必ずしも愚にあらず、時劫の力のみひこり悠久なり。壞相の今日に學ぶべきを學び、よき人間の明日を築くこ、生存一路の行程には似たり。

幾年の昔宿りしその家の思ひ出湧きてたゞに過ぎ行く

朽ちたりし床も多かり大和路の淋しき宿を今日も思へり

この日秋晴の一日、暖きこゝ初夏の如く、かぎろへるこゝ陽春の如し。

草むらのつゞく限りに花ありて大和國原秋日かゞやく

古の奇しき姿や埋み持つこゝの田の面たゞに秋の日

草むらに何の縁もなければも忘れがたかり斑雀の野邊

旅人の心きざしぬ岐れ路に石のしるべの立てる大和路

法輪寺の薬師、造型の律動、純朴にして又雄偉、人間の官能を遠離す。法起、法輪の二寺、式を推古に傳へ、塔影、空に浮ぶも、補修度を重ね、原形また甚だ杳かなり。地誌、法起寺を岡本の宮趾に擬す。太子、法華親講を傳ふるころ、史實今にして知るに難く、講經の儀僧の如しき雖も、又茫漠の過去なり。

消えて行く時のうたかた池後の寺に瓦のかけを慕へり

聖像はつゝましやかにおのづからかの童眞の今にしたゝる

さはがしきもののみな枯れて今年もよこゝのみ佛また秋に入る

九輪ミ水煙ミ、空華を空中に描く塔影は薬師寺なり。露盤刻むところの偈「亭々寶刹、寂々法城、福崇億劫、慶溢萬齡」の願、ひたすらに恃むべきは「廣運慈哀」なるべきも、形相を有爲に礎立すれば、莊嚴必ずしも永遠ならず。應化の佛寶すでに行化を八十の生涯に閉づ。空慧一相を守らざる伽藍の質料、荒蕪頻りに年あり。木質腐蝕し易く、金石風化を喜ぶ。金堂の佛像、式を白鳳に傳へ、遠く唐初の構想を残すは雖も、偏計皆空の説、端嚴の應現をも制外に許さず。痛惜今更に新なり。過ぐる年の慈恩會、冷寒の夜氣を冒し、隨喜をこの堂に致す。佛前帳を垂れて慈恩の聖像を祀り、寶前の高座二基、立者その一つにあり。課題、瑜伽の一論彌勒造するか、無着造するかにあり。定立ミ反立ミすべて諷誦、論議互ひに連り、刻、深更に及ぶ。諷誦の旋律、句法の格調、多く足利の後なるべく、稲に鎌倉の一脈を

も残せるに似るか。考察又時あるべく、懷舊たゞこの日に頻りなり。葡萄、四神の臺座。想化の玄致、格律の雄渾、又尙古の病辭を目ざます。左背の一隅に當つて損傷の破裂、却つて古辭の愛着を誘ひ、偏計所執の詩興を培ふ。

佛足石ミ歌碑、この寺の淋しさなり。歌碑扁平にして長きまゝに、法難の日、鋳かけの流に、石橋の姿して埋れたりしを、今の興隆に逢ふ。形あるもの、榮辱の彼岸に到らず。聖誦の聖碑さへや、忍辱をかの蹂躪に學ぶ。「亭々實刹、寂々法城」の塔銘、遂にはかなき人間のすさびの如く、寂滅爲樂のこゝ、時あつて性空無爲の道場をさへ離るゝにも心通へり。

みあこつくる石のひゞきのそのかみを偲び偲べはこの日夕ぐれ

ちゝはゝの爲めもろびこのその爲めこ刻める石に秋の冷え來る

唐招提寺は鑑眞の遺趾、上求ミ下化ミの情熱、まゝこゝに難遭の聖者。造型また一様式を標示し、一系流を創始す。繁縛の累なきにあらざれども、雄渾の一態なり。千手觀音の多技、般若一相の彼岸嚴肅を去るこも名づくべきか。戒壇今趾をこゝむ。

戒壇のあたりはかなき尾花にてありし願の今は涙か

戒律の掟あまたにミゝのひて淨行あはれ人を去る今

たぐひなきひじりひじりのあみなれぎこの秋風の人を救はす

迫り寄るものは短き秋の暮なり。人、急ぎに急ぐ。

法華寺は古の總國分尼寺、今清楚の淨域、若き尼僧に依つて中尊、聖觀音を拜ひ。造型、弘仁なり。姿態、優雅にして婉に、下化廣く女性に及ぶ。

はてしなく應化尊き聖像の肩にかゝりて髪の美はし

横笛の像きて、ありし情念を文がらの枯稿に繋ぐ。「瀧口殿の御執心ゆゑに」この解説、境三人に依つて、哀愁常の如くにもあらず。恩愛の彼岸、やがて恩愛の此岸に選ばず。「梅津の里の春風に、餘所の匂ひもなつかしく、大井川の月影も、霞にこめて朧なり、一方ならぬ哀れさも、誰故こそ覺えけめ。」もつれ行く心情、流轉をかの往生院に重ね、棄恩入無爲のこゝ、清淨心院の靈山に終る。「横笛もさまをかへけるよし聞えしかば瀧口入道一首の歌をぞ送りける。そるまでは恨みしかぎもあづさ弓、まことの道に入るぞうれしき。横笛が返事に、そるまでも何かうらみあづさ弓、引きまゝむべきころならねば。其後横笛は奈良の法華寺にありしか。其思ひの積りにや、いく程なくてつひにはかなくなりけり」。平語の戯作、横笛、法華寺修道のこゝ、實事をたゞる由あるにあらざれども、想念の幻化、虚は實の如く、實又時に虚の如し。感傷を紅涙に遊び、やるせないものを藻華にあやなす。生き行くこゝのはかなき所執をあはれむ。

みたされし祈もありきみたされぬ祈もありて時のわたつみ

人間の願ひ願ひに刻まるゝみ佛のかず増しに増せども

夕闇を拂つて奈良の街に燈火を浴び、一日の行路を一碗の粗糲に勞ふ。淡きこの舊都の秋の如し。書肆に古經の斷片を漁れども價を得ず。再び車を歸途に走らす。夜氣俄かに襲へるは山峽なく。江風しきりに窓を打つは長堤なり。

淋しさの旅の姿ははつるこもはてなきものかこゝの夕風

旅なれば夕闇を鳴く鳥をさへ恐れたるかに急ぐ川添

長橋の幾つを越えたるが如く、越えざるが如く、燦爛たる街燈の下、車を捨てゝ漸く地上に立つ。闇を通して千歳の今に歸れるが如し。

回顧に古を築くも生の一態なり。過去を廢墟に埋め行くも命の力なり。古癖、頑洞の如く、考現、飄風の如し。人間

の一實に徹せざれば、歴史の學すべて夢遊の漫步に終る。無用の用、時に用の無用に優るべきも爛熟文化の餘弊、殆ど悉く無用の無用に始終す。願はるべきは良能、求めらるべきは衆生無邊の愛執。千歳を願て迷妄の源泉を學び、近く明日を待んで度斷の悲誓に進む。順逆髪を容れず。たゞ正見と正業と、大虛に夢を描き、夢中に現實を創め制る。創生のこゝ、神にあらず。本具の良能のみよく法界の所願を知る。更く行け夜の河畔、水うたゝ黒く、彩燈あざやかにかの妖氣をこほす。はてしなき人間の闇に、暫らく哀愁を心の糧に憩ふ。

尾をひきて消ゆる星あり
大空のうたかたに似て消ゆる星あり